

BOOKS

はなからうか。本書がその目的のために、広く読まれ、高
校や大学のサークルやゼミのテキストとして
用いられることを望んでやまない。

現代思想の隘路を突破する鍵
『意味と生命』

青土社 1800円

栗本 慎一郎著

(評者) 社会学 橋爪 大三郎

「意味」と「生命」。この二つは「と」で繋
がれているが、実態は異なるという。マ
イケル・ポランニーの「層の理論」によれ
ば、そう言えるらしい。著者栗本氏は、この
書で、「暗黙知理論」として知られるポラン
ニーの説を、そのもう数歩先へ進めて、現代
思想の一角に新しい地歩を築こうとする。
けつして読みやすい本ではない。ヴィトゲ
ンシュタイン、ホフスタッター、メルロ・ポ
ンティ、プリゴジンなど、哲学・認知科学
・現象学・散逸理論のおおどころを、それな
りに読みこなして当たり前、という書き
方だ。話題はあちこちに飛び、盛り沢山であ
る。ただその発想は一貫しており、全編「層
の理論」の応用問題になっている。
そこでこの「層の理論」を、簡単にでも押
さえておく必要がある。
まず、「層の理論」の対極にあるのが、ア
トミズム(あるいは還元主義)である(その
特徴は、閉鎖的な言語体系だとされる)。ア
トミズムでは、部分が全体を離れても実体と
して存在し、それが機械的に集まって全体を
構成すると考える(決定論)。それに対し
て、「層の理論」では、なにが部分でなにが
全体かは相対的だ。部分は、全体のなかにあ
るから実体のようにみえるだけで、実はもっ
と小さなべつの全体なのかもしれない。全体
にしても、もっと大きななかの部分なのか
もしれない。こうして、部分/全体の関係
は、いれど構造みたらになって、上下に限り
なく続いでいく。
「層の理論」がこんなものだ(はたして「理

旧刊・旧著

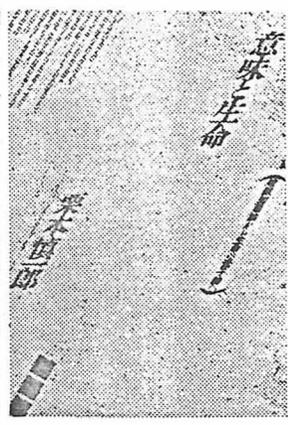
マックス・ウエーバー
『職業としての学問』

日本暗号協会会長 長田 順行

だれにも思い出に残るような一冊の本に
出会うことがあるだろう。私にとってそれ
が本書である。初めに購入したものは、サ
イド・ラインや書き込みが多くなって、今
では新旧の二冊が手元にある。
ウエーバー(一八六四―一九二〇)が、
有名なドイツの社会学者であったこと
は、改めて言うまでもあるまい。この偉大
な学者の学問的な業績について、私はそれ
をよく理解しているわけではない。しか
し、本書はミュンヘン大学で学生を相手に
講演した内容であって、予備知識がなく
も分かりやすい。
ここでウエーバーが何を言おうとしてい
るかは、訳者の序文にまとめてあるので、
それを読むとよい。
ところで、かつて産経新聞の正論欄に
(昭五十三・五・十五)、会田雄次氏は

BOOKS

BOOKS



「論か?」とすると、私の知るかぎり、ヘー
ゲルの弁証法によく似ているようだ。ただし
ヘーゲルの場合、底(有)と天井(絶対精
神)があるが、ポランニーはそのような限界
を考えない。極微から宇宙大にまで連なる層
の連鎖を想定する。こういうことを察するの
が、暗黙知である。
自然科学で業績をおさめたポランニーは、
これも暗黙知のおかげだというわけで、それ
を一般化する。彼によれば、原子→分子→
……とたどられた生命進化のプロセスの(当
面)最高の所産は、人間の精神である。しか
しそれも、もっと大きな全体(宇宙的生命)
の一部であろうという。彼はそこに、未発見
の法則を想定する。私はこれは、ユダヤ神秘
思想の直系だなあ、と思うのだが、栗本氏は
そう考えない。心身問題、生命科学、大統一

欧知識主義を排して何度も精読せねば判るま
ら(あとがき)とあるけれども、難解なの
は論旨に無理があるせいもあるように思う。
本書はよく売れたそうだが、通読できずに
挫折した人が多いかもしれない。そういう人
は全体のイメージを掴むのに、たとえば第三

理論の隘路を突破する鍵であると考ええる。
この書は、栗本氏の楽屋裏を公開するかた
ちになっている。これを信ずるなら、栗本氏
は「魔法使いの弟子」である。彼によれば、
あらゆる現代思想家のなかで、ポランニーが
いちばん進んでおり、ヴィトゲンシュタイン
がそれに次ぎ、……というランクがある。近
代は、アトミズム(還元主義)の言説が支配
する時代だった。それがいま、終わろうとし
ている。ポランニーの「層の理論」を援用す
るなら、自然科学の難問だろうと、哲学、社
会科学の難問だろうと、たちどころに解決の
方針がみつかるに違いない。この書全体が、
そういうことを熱心にのべてやまない。
マイケル・ポランニーが今世紀の傑出した
知性であることは確かだろう。しかし、私は
栗本氏のように楽観することができない。疑
ぐり深い私は、なぜ栗本氏がこうも先走って
信じやすいのだろう、などと考えてしまう。
本書三十二頁によれば、やや出版を急いだと
いうから、本当はもっと説得力のある議論な
のかもしれない。ただ少なくとも今回読んだ
限りでは、無条件に共鳴できるところが期待
したほど多くなかった。残念なことである。
「本書はかなり難解である……旧来の俗流西

章第三節の最初のところを読むといえどもし
れない。
近代はまだ始まったばかりで、(この書の
ような)少々の揺さぶりではびくともしな
い、と私は思う。もう少し地味でも、緻密な
議論のほうがこたえるはずだ。

「性懲りのない国民性、精神平和主義を排
す、暗号解読など現実的努力を」といった
見出しの一文を寄せられた。私の専門は暗
号であるが、それはことばとの関連におい
てはメタフィジカルなものであり、技術的
な側面からは経験科学だと思ふ。
そこで私は、国家レベルの暗号の研究に
たずさわる人々に対しては、本書の次の言
葉を引用して語を締めくくりにしていい
。「今日何か実際に学問上の仕事を完成し
たという誇は、独り自己の専門に閉じこ
もることによってのみえられるのであ
る。これは単に外的条件としてそうであ
るばかりではない。心構の上から言っ
てもそうなのである。〈中略〉だからし
て、いわば自らめかくしを着けることの
できない人や、また自己の全心を打込ん
で〈中略〉夢中になるといったようなこ
とのできない人は、まず学問には縁遠い
人である」
これは、その一例に過ぎないが、一九一
九年に語られたその内容は、今日でもわれ
われに多くのことを教えてくれる。
(尾高邦雄訳、岩波文庫、一九五一年)

ひところ翻訳エンタテイメント界を席捲
した感のあったホラー小説ブームも、最近
は下火になってきたようである。帝王ステ
イゲン・ファン(凡目目をつつすだが、

MYSTERY